

## 教員紹介

<b>岡田 豊 教授</b> 専門分野：近代文学	
<b>研究内容</b>	廣津柳浪を対象としながら、明治20年代の表現について考察している。明治20年代初めに、女子参政について扱った『女子参政蠶中楼』や女性の一人称語り的小説『残菊』を書き、性急な近代化の裏側を見つめ続けた彼の仕事は興味深い、文学史を彩る作家たちの活躍の陰に隠れてしまっている。今後も、彼の問題意識やテキストの表現の可能性と限界とを見定めていきたい。方法としては、テキストを、同時代の文化的・社会的な状況の中に置いて分析する。近年の文化研究、ジェンダー論などが可視化した問題は多数あり、その功績も大きい、それらの理論を踏まえつつ、文化的な状況の分析に偏らないよう心がけたい。また、これらの関心領域と文学との関連を考えてゆく作業を、現代の文学にまで拡げて考察している。
<b>研究業績</b>	1. 「日清戦後後文学の一主題としての〈一家和熱〉—廣津柳浪「河内屋」を出発点として—」、『論集樋口一葉Ⅲ』所収、おうふう、2003年 2. 「田辺聖子と現代女性作家」別冊『国文学解釈と鑑賞』、2006年 3. 「廣津柳浪『変目伝』の可能性」『駒澤國文』、2008年 4. 「廣津柳浪『異だね』をめぐる諸問題」『日本近代文学館年誌 資料探索6』、2010年 5. 「江國香織「号泣する準備はできていた」とその周辺」『駒澤國文』、2015年
<b>勝原 晴希 教授</b> 専門分野：近代文学	
<b>研究内容</b>	萩原朔太郎の研究から出発し、朔太郎と北原白秋の関係を考えることを通じて、近代詩の成り立ちそのものから見なおす必要を痛感した。そのために江戸時代との（韻文における）連続と不連続について検討し、18世紀から21世紀の今日に至るまでの詩歌の変遷を見極めようと試みている。近代文学における韻文領域の研究は、散文領域に比して立ち後れているように思われる。その原因の一つに、特定の詩人に捉われて広範な視点を持ちえないことがあるのではないかと。常に歴史的な視点を見失わないように、研究を進めて行きたいと思っている。
<b>研究業績</b>	1. 「江戸の身体、明治の精神」『正岡子規集』岩波書店、2003年 2. 『和歌をひらく』1～5巻、共編著、岩波書店、2005～2006年 3. 『「日本詩人」と大正詩〈口語共同体〉の誕生』編著、森話社、2006年 4. 『現代詩大事典』編著、三省堂、2008年 5. 『都市モダニズム詩の大河Ⅰ』編著、ゆまに書房、2010年
<b>倉田 容子 准教授</b> 専門分野：近代文学	
<b>研究内容</b>	明治から現代までの小説を研究対象とし、ジェンダーやセクシュアリティ、エイジング、エスニシティ、地域などを視座として物語構造を分析するとともに、人間の生を形作る諸条件について考察している。もともとは近現代文学におけるジェンダーおよびエイジング表象について研究していたが、我々の文化がどのような線引きを行い、何を損なうことで成り立っているのか、根源的に考察すべく、現在はより広く近代社会の構造と文学の関係に関心を持っている。
<b>研究業績</b>	1. 『語る老女 語られる老女—日本近現代文学にみる女の老い』學藝書林、2010年 2. 「三枝和子と一九八〇年代フェミニズム—『鬼どもの夜は深い』を中心として」『日本近代文学』第91集、2014年 3. 「宮崎夢柳『芒の一と叢』における女性表象」『文学・語学』第220号、2017年 4. 「土佐を歩く夢柳—初期テキストと土佐自由民権運動の距離」『駒澤國文』第55号、2018年 5. 「断片化に抗う—『ナチュラル・ウーマン』受容史とクィア・リーディングの行方」『昭和文学研究』第77号、2018年
<b>近衛 典子 教授</b> 専門分野：日本近世文学	
<b>研究内容</b>	上田秋成を中心に、江戸時代中・後期の上方の文学を研究している。秋成は『雨月物語』『春雨物語』の著者として知られているが、それ以外にも浮世草子、和歌・和文、俳諧、狂歌、国学研究書等、幅広い著作を残している。学問的著作と戯作との相互関係、出版にまつわる諸問題、大坂騒壇を始めとする秋成を取り巻く文化圏との交渉等、従来見落とされがちであった視点から秋成を多角的に考察し、その文藝の総合的な把握を目指している。
<b>研究業績</b>	1. 『上田秋成新考—くせ者の文学—』ぺりかん社、2016年 2. 『上田秋成研究事典』（上田秋成研究会編）笠間書院、2016年 3. 「『雨月物語』の当代性—夢占と鎮宅靈符—」『近世文藝』99、2014年 4. 「秋成と江戸歌壇—『天降言』秋成抜粋本をめぐる—」『文学』10-1、2009年 5. 『動物怪談集』（江戸怪談文芸名作選・第4巻）（校訂代表）国書刊行会、2018年
<b>櫻井 陽子 教授</b> 専門分野：中世文学	
<b>研究内容</b>	『平家物語』諸本の本文の位相の分析を窓口として、中世という時代の文化状況の特性の追求を主な現在のテーマとしている。江戸時代初期まで、文学作品は書写という行為によって継承されてきた。書写には単純な誤写から意図的な改作まで、様々な段階の異本・異文誕生の契機が胎動する。その具体相の分析は、作品の特質を解明する手段となる一方で、同時に、各時代における作品の流通、解釈等、作品の受容の歴史を辿ることを可能とする。更には流通や解釈をもたらした時代の特性まで考察を深める契機を与えてくれる。多くの異本を持つ『平家物語』の諸本研究は、『平家物語』の生命力の淵源の探究と共に、中世の文化を解明する切り口ともなる。
<b>研究業績</b>	1. 『平家物語の形成と受容』、汲古書院、平成13年2月 2. 『平家物語大事典』（共編）、東京書籍、平成22年11月 3. 『平家物語』本文考、汲古書院、平成25年2月 4. 『平家公達草紙』（共著）、笠間書院、平成29年2月 5. 「『治承物語』と『平家物語』」、『駒澤國文』56号、平成31年2月 6. 『歌人源頼政とその周辺』・『平家物語』の源頼政、青簡舎、平成31年3月
<b>田中 徳定 教授</b> 専門分野：中世文学	
<b>研究内容</b>	中世の文学作品や中世唱導資料の読解を通して、仏教信仰の様相を明らかにし、中世日本人の思想や精神世界のありようを探究している。特に、当時の人々の信仰と密接に関わっていたと考えられる追善供養法会で用いられた唱導資料を中心として、それらの唱導資料と仏教説話、室町時代物語との影響関係を探り、民衆に受容された仏教信仰のありようを考察している。
<b>研究業績</b>	1. 『孝思想の受容と古代中世文学』新典社、2007年 2. 『義経伝説と鎌倉・藤沢・茅ヶ崎』新典社、2015年 3. 「中世唱導資料にみる高僧と母の物語をめぐる」、『駒澤國文』48号、2011年2月 4. 「中世唱導資料にみる母性」、『国語と国文学』88-7、2011年7月 5. 「釈迦像の日本の変容—唱導資料を中心として—」、『駒澤國文』57号、2020年7月

<b>土井 光祐 教授</b>	専門分野：国語学
<b>研究内容</b>	古代、中世を中心とする日本語の歴史的研究を主な研究領域としている。諸処の古典籍の原本調査に基づく文献学的方法を厳密に適用して資料的性格を吟味し、背景にある成立事情、言語意識等の側面から分析を進めている。法談聞書類を中心に、学僧の言語生活全般を視野に入れて、文語規範の弛緩の実態とその要因という視点を重視している。種々の情報をデータベース化して、総体的な視点から言語資料の特質を解明することを目指している。
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「高野山性厳房宥快の講説とその聞書類について—金剛三昧院蔵大日経疏傳受抄に見える古辞書逸文を中心に—」(『日本文学・敦煌学・漢文訓読の新展開』, 汲古書院, 平成17年)</li> <li>2. 「中世における高野山関係法談聞書類の一特質—金剛三昧院蔵住心論聞書をめぐって—」(『築島裕博士奉寿記念国語学論集』, 汲古書院, 平成17年)</li> <li>3. 「国語史資料としての高山寺蔵『五蘊観井聞書』について」(『駒澤國文』44, 平成19年)</li> <li>4. 「明恵関係聞書類における「口語」と「文語」の混在と機能」(『文学』8-6, 平成19年)</li> <li>5. 「聞書」から「撰述書」へ—伝明撰述書「護身法事」における本文の生成と伝承とを事例として—」(『駒澤國文』46, 平成21年)</li> </ol>

<b>中嶋 真也 教授</b>	専門分野：上代文学
<b>研究内容</b>	『万葉集』の表現と享受を研究のテーマにしている。表現に関しては、景物に着眼し、どのような詠まれ方をしているのか、具体的な地名との関わりがあるのかなど、『万葉集』の中での表現史も踏まえつつ、一首一首の精読を心がけている。そして平安以降の和歌表現における連続と断絶にも留意している。享受に関しては、『万葉集』の諸本を扱う上で、欠かせない鎌倉時代の仙覚を主な対象としている。仙覚の校訂活動を辿ること、その知がどのように育まれたのかを理解すべく、平安後期の歌学書における万葉享受の状況を把握することを心がけている。
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「仙覚と六条家本万葉集」『上代文学』第85号, 2000年</li> <li>2. 「笠金村吉野讃歌の方法—九二〇年～九二二番歌を中心に—」『美夫君志』第63号, 2001年</li> <li>3. 「『心もしのに』考」『国語と国文学』第80巻第8号, 2003年</li> <li>4. 「『ちどり』と『かはづ』」『駒澤國文』第43号, 2006年</li> <li>5. 「月と譬喩—満誓「月歌」を中心に—」『美夫君志』第72号, 2006年</li> </ol>

<b>松井 健児 教授</b>	専門分野：中古文学
<b>研究内容</b>	「源氏物語」を中心に、平安時代の物語文学の研究を行っている。現在は「平安物語における風景和文の形成」をおもなテーマとして、和文表現における物語空間の成立を、文章形成史の側面から追究している。自然叙述、物語空間、和歌的言語などの含み持つ、歴史的心性や様式性を解明することによって、平安文学における代替世界を新たに発見することが課題である。方法論をともなった「読み」をめざしたい。
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『源氏物語の生活世界』単著, 翰林書房, 2000年</li> <li>2. 『源氏研究』1号～10号, 共編著, 翰林書房, 1996年～2005年</li> <li>3. 「『源氏物語』の演技する空間—『源氏物語と和歌』青簡舎, 小嶋菜温子・渡部泰明編, 2008年</li> <li>4. 「風景和文の変容—『源氏物語』の景物の構成—」『文学』岩波書店, 12巻1号, 2011年1・2月</li> <li>5. 「風景和文の遠近—『源氏物語』の接続する主体—」『日本文学』日本文学協会, 68巻6号, 2019年6月</li> </ol>

<b>三樹 陽介 講師</b>	専門分野：日本語学, 方言学, 音声学
<b>研究内容</b>	専攻分野は日本語学(特に方言学, 音声学)。全国でフィールドワークを行ない、収集した音声データを基に研究を進めている。近年は、東京都の八丈島で話されている八丈語(八丈島方言)に傾注し、記述文法書や音声談話資料の作成と分析を行なっている。八丈語は奈良時代の文献以前の古代日本語の特徴を今も残しており、日本語祖語の姿を知る大きな手掛かりとなるものである。また、八丈語はユネスコによって指定された日本の8つの消滅危機言語のうちの1つであることから、地元教育委員会や国立国語研究所、文化庁と連携し、言語継承教育にも携わっている。
<b>研究業績</b>	<p>並行して、現代日本語の変容の記述と分析を目的とし、特に音声・アクセントの面から東京都市圏の言語動態について研究している。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『首都圏方言アクセントの基礎的研究』おうふう, 2014年</li> <li>2. 『実践方言学—方言の教育と継承—第2巻』くろしお出版, 2020年近刊(第9章を分担執筆)</li> <li>3. 「東京都八丈島末吉方言の動詞活用体系試論」『首都圏方言の研究第10号』, 2019年</li> <li>4. "Kamishibai in Dialect - Aiming to inherit the endangered Hachijo-shima dialect", Amfiteater Journal. Slovenian Theatre Institute, 2019年</li> <li>5. 「八丈語が保存する古代性と新しい変化—二格とイー格の使い分けを例に—」『ブラジル日本研究国際学会論文集』, 2017年</li> </ol>

<b>山口 智弘 講師</b>	専門分野：漢文学
<b>研究内容</b>	近世日本の漢学(中国古典学)を主に研究し、当時における文芸・思想の形成と漢学の展開との関係性の解明に取り組んでいる。具体的には、当時の文人の中国古典学者としての側面に注目し、彼らによる中国古典注釈書の覚書や草稿を分析することで漢学の進展の機微を捉えて、そこから、漢詩文として結実した表現と思想の意義の捉え直しを試みている。日本漢学に画期をもたらした近世中期の伊藤仁斎・荻生徂徠を主な研究対象としつつも、仁斎の長子である伊藤東涯、国学者の契沖、幕末維新期の安井息軒などの漢学にも目を広く向け、日本における文芸・思想・漢学の相互作用の史的展開を叙述するための研究を進めている。
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「徳川中期経学史考—荻生徂徠及び伊藤東涯による仁斎学の継承と展開」『年報地域文化研究』第14号, 2011年</li> <li>2. 「『尚書』義典と荻生徂徠—読解と思索について—」『中国—社会と文化』第26号, 2011年</li> <li>3. 「『稽古』と『安天下』—荻生徂徠の「義」について—」『倫理学年報』第62集, 2013年</li> <li>4. 「荻生徂徠の初期儒学と仁斎学—自筆本『読荀子』の再考を中心に—」『中国文化』第72号, 2014年</li> <li>5. 「安井息軒の経世論—かの思想の素描として—」『日本漢文学研究』第12号, 2017年</li> </ol>